

マンガにおける「オルタナティブ」性の位置

「劇画ブーム」期言説における「劇画」像に注目して

雑賀 忠宏 (京都精華大学)

【目的・方法】

「オルタナティブ」という語は文化研究において、しばしば質量共にヘゲモニックな位置にある文化表象、すなわち「メインストリーム」に対する抵抗や革新のポテンシャルを示すものとして、重要な意味を込められて用いられる。とりわけ、マンガ／コミックスを対象とした文化研究の文脈においては、「オルタナティブ・コミックス」という語に代表されるように、大衆向け市場を基盤として展開される文化商品としてのマンガ／コミックスに対し、商業性からは一線を画する、実験的・革新的性質を旨とするような実践・作品にもつばらこの語が用いられている。

欧米コミックス文化圏における「オルタナティブ・コミックス」、およびその延長線上にあるジャンルとしての「グラフィック・ノベル」の、日本におけるカウンターパートとして欧米圏のマンガ・コミックス研究でしばしば言及されるのが「劇画」である。しかし、竹内美帆が指摘するように、「劇画」という名で括られているものの内実には大きな差がある(竹内 2012)。欧米圏の研究者や「マンガ通」たちが「劇画」を「オルタナティブ」なコミックス／マンガの枠組みへと接続しようとするのに対して、日本においてはむしろ「劇画」は年長者向け娯楽読み物としてのマンガ内ジャンルを指す言葉として認識されているのである。

本報告では、「劇画」が貸本マンガ家たちによって掲げられた活動の旗印から、『週刊少年マガジン』を中心としたジャンル化(瓜生 1996)による浸透、そして「劇画ブーム」のなかで知識人によって様々な期待の投影とともに語られる対象へと推移していった時期に注目する。そして、1970年代前後の「劇画ブーム」をめぐる同時代のマスメディア上の言説を中心として、こうした文化の場における〈中央〉-〈周辺〉の付置構造の認識をめぐるズレを生み出す要因となっているであろう「劇画」像の多面性をすくい取り、日本のマンガ文化の分析における「オルタナティブ(なマンガ)」という概念の射程と有効性を検討することを目的とする。

【考察】

1960年代前半における週刊少年誌の登場と後半における青年誌の登場を経て、70年代には「劇画」は「児童文化」の枠組に留まらない、そしてなおかつ風刺画としての「漫画」の流れをくむ「大人マンガ」とも異なるマンガを指し示す言葉として、幅広く用いられるようになっていった。しかしながら、こうした「劇画」の拡大＝「劇画ブーム」は、70年代末の同時期にそれについての文章を発表しつつ、それに大衆文化としてのマンガの拡大と成熟を見て取った副田義也と、人々の生活に根ざした民衆文化としてのマンガの衰退を見出した石子順造のように、マンガというポピュラー文化のポテンシャルに対する期待や視点の差異に応じて、まったく異なる顔を見せるようになっていく。それは会田雄次と大島渚の間の「劇画論争」(1973年)や1978年の津村喬・稲葉三千男の論争のような、「高尚文化／低俗文化」という従来の対立枠組の中で「劇画」をどう位置づけるかというものとは大きく異なるものでもあった。そのなかで、1975年の『戦後マンガ史ノート』において今日の「劇画」への関心の消失をもって議論を締めくくった石子順造や、1978年の『中央公論』の特集「劇画を認知すべきか」に寄せた文章で「ぼくはかつてのように劇画に身をよせることを止めようと思う」と書いた山本明のように、「劇画」の民衆文化的性質にその「オルタナティブ」な文化としてのポテンシャルを期待するがゆえに、それが「高尚／低俗」を無効化するポピュラーなものとして展開していく過程を結果として否定的に捉えるような視点も登場してくる。こうした「劇画」への期待の錯綜のうち、「メインストリーム」と「オルタナティブ」が二項対立ではなく、緩やかに連続するような、日本におけるマンガ文化の場の特性を見出すことができるだろう。

【文献】

瓜生吉則、1996、「〈劇画〉ジャンルの成立と変容——メディア論的視座による〈少年もの〉ジャンルの事例研究」、『東京大学社会情報研究所紀要』第52号
竹内美帆、2012、「線から捉えなおす『劇画』——さいとう・たかをを中心に」、『日韓漫画研究 国際マンガ研究3』、京都精華大学国際マンガ研究センター